

ちようあんしゆんほう
長安春望（廬綸）

とうふう
東風
あめ
雨を
ふ
吹いて
せいざん
青山を
す
過ぐ

かえ
却つて
せんもん
千門を
のぞ
望めば
そうしよく
草色
かん
閑なり

いえ
家は
むちゆう
夢中に
あ
在つて
いす
何れの
ひ
日にか
いた
到らん

はる
春は
こうじよう
江上に
きた
来つて
いくにん
幾人か
かえ
還る

せんげん
川原
りようじよう
繚繞たり
ふうん
浮雲の
ほか
外

きゆうけつ
宮闕
しんし
参差たり
らくしyou
落照の
あいだ
間

たれ
誰か
おも
念わん
じゆ
儒と
な
為つて
せなん
世難に
あ
逢い

ひと
独り
すいびん
衰髯を
も
将つて
しんかん
秦関に
かく
客たらん
とは

東風吹雨過青山
却在千門草色閑
家在夢中何日到
春來江上幾人還
川原繚繞浮雲外
宮闕參差落照間
誰念爲儒逢世難
濁將衰髯客秦關

解説 科挙の試験に合格せず、うつうつとして楽しまざるある日、長安の春景色を眺めながら、自分の不遇を嘆いて作つた。

語釈 ※東風Ⅱ春風。※千門Ⅱ宮城のたくさんさんの門。※閑Ⅱのどか。草がいたずらに繁茂していることをいう。※春來江上幾人還Ⅱ春は江上に巡つてきたが、何人故郷に帰れるだろうか。※繚繞Ⅱ長く連なっているさま。※宮闕Ⅱ宮殿。※參差Ⅱ高低ふぞろいなさま。※落照Ⅱ夕日のひかり。※誰念Ⅱ自分は思つてもみなかつた。※世難Ⅱ世の中が乱れること。※衰髯Ⅱ白くなった髪の毛。※秦関Ⅱ長安のこと。

通釈 春風が雨を吹いて青い山を通りすぎていく。沢山の宮城の門のあたりを振り返ると、若草がいたずらに、おい茂っている。故郷の家は夢にばかり現れるだけで、いつになったら自分は家に帰れることであらうか。春が川の辺にもどつて来たが、何人が故郷に帰ることが出来ただろう。川岸の原っぱは長く浮き雲の向こうまで続いており、高い、低い宮殿は夕日に照らされて見える。儒者となり、この乱れた世に遭い、髪の毛白くなった身をもつて、ひとり長安の旅の空で暮らそうとは思つてもみなかつたことだ。